

日本語教材における音声項目に関する一考察

戸田貴子 (とだ たかこ) toda@waseda.jp

生方哲男 (うぶかた てつお) t_ubukata@asagi.waseda.jp

大久保雅子 (おおくぼ まさこ) okubomasako@yahoo.co.jp

尹渚禎 (ユン ヒョジョン) luvya48683@yahoo.co.jp

1. はじめに

本研究の目的は日本語学習教材のイントロダクションにおいて、どのような音声項目が取り上げられ、どの程度記載されているかということ进行调查することである。

先行研究では、初級総合教材において韻律部分に関する音声項目の扱いが少ないということがわかっている(土岐 1986、河野 1999,1998)。近年、新しい日本語学習教材が次々と出版されており、音声に特化された発音練習教材も出現しているが、これらの教材における音声項目の扱いについては、先行研究では比較検討されていない。このため、本研究では、1990年以降に出版された日本語学習教材を取り上げ、分析を行うことにした。

2. 調査方法

調査の対象は、初級総合教材 22 種類、教材に付属の翻訳文法解説書 2 種類、および発音練習教材 3 種類の合計 19 である(表 A・B)。

初級総合教材では音声項目が主にイントロダクションの部分で扱われていることから、当該部分における音声項目の扱いを調査した。

発音調査項目および評価基準は土岐(1986)を踏まえた上で、発音練習教材については先行研究では調査がなされていないため、筆者らが新たな項目を加えた。

評価基準は以下の通りである。説明が詳しく記載されている「」、極めて簡単な説明に終わっている「」、触れられていない「」。

3. 結果

初級総合教材については、6 種類の教材に音声項目の記述が見られなかった(資料 2)。音声項目の扱いのある初級総合教材についても、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムに関する記述は圧倒的に少ないということがわかった。(表 A)

上記 6 種類の音声項目の記述が見られない初級総合教材の共通点は、イントロダクション及び本文中に、媒介語による解説がないということであった。

発音練習教材においては上記で記述が少なかった音声項目についても言及されており、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムのすべてが含まれていた。(表 B)

4. 考察

結果から、1990年以降出版された初級総合教材についても土岐(1986)、河野(1999,1998)の結果同様、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムについては扱いが非常に少ないことがわかった。近年、コミュニケーションにおいて韻律特徴が重要

な役割を果たしているということがわかってきた。このため、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムに関する音声研究の成果が数多く報告されている。しかし、結果から、その研究成果が初級総合教材には十分に応用されているとは言えないという実態が示唆された。

次に、結果 からわかることは、初級レベルの日本語学習者を想定した場合、媒介語を使用せず、日本語だけで音声項目を導入することは困難であるということである。音声項目の記述が見られない初級総合教材の共通点を鑑みると、使用される場所が主に日本語教育機関であることを前提に作成されている。すなわち、教師の指導があることを想定しているため、音声項目の記載がなくても必要に応じて教室活動に取り入れることが可能である。一方、導入部分において媒介語を使用している教材は、原則として学習者が自習用として使用することも想定しているため、教師の不在にも関わらず、媒介語により音声項目が記載されていることで、理解しやすくなるであろう。

最後に、結果 から、発音練習教材では初級総合教材で扱われていないポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムを含んでおり、従来の総合教材で欠落している韻律特徴が補われていることがわかった。このような音声に特化された発音練習教材の出現は、初級総合教材では学習し得ない音声項目を網羅することの必要性を示唆している。

5. まとめと今後の課題

本調査から、初級総合教材においては、ポーズ・プロミネンス・イントネーション・リズムに関しての記述が圧倒的に少ないことが明らかになった。この結果については、約 20 年前、10 年前に行われた調査と変化がなかった。また、音声項目の記載がない教材については、イントロダクション及び本文中に、媒介語による解説がないことがわかった。さらに、本研究で初めて音声に特化された発音練習教材を分析してみて、従来の総合教材で欠落している韻律特徴がカバーされていることが明らかとなった。

今後の課題は、海外で出版された日本語総合教材および発音練習教材を対象とした調査を行うことである。

資料1（音声項目の扱いのある教材）

- JAPANESE FOR EVERYONE 学習研究社(1990)
SITUATIONAL FUNCTIONAL JAPANESE 凡人社(1995)
はじめてのにほんご 改訂版 大修館書店(1995)
新日本語の基礎（本冊）スリーエーネットワーク(1997)
新日本語の基礎（文法解説書）スリーエーネットワーク(1997)
ICUの日本語：初級 講談社インターナショナル（1997）
はじめてのいっぽ スリーエーネットワーク(1998)
初級実践日本語 アルク(1998)
A COURSE IN MODERN JAPANESE 名古屋大学(2002)
日本語20時間 スリーエーネットワーク(2003)
日本語初級げんき JAPAN TIMS(2005)
ELEMENTARY JAPANESE TUTTLE (2005)
みんなの日本語（本冊）スリーエーネットワーク(2006)
みんなの日本語（文法解説・翻訳版）スリーエーネットワーク（2006）
入門日本語 アルク(2006)
JAPANESE FOR BUSY PEOPLE AJALT (2006)

資料2（音声項目の扱いのない教材）

- 新文化初級日本語 文化外国語専門学校（2000）
日本語初級 新装版 東海大学出版会（2002）
語学留学生のための日本語[] 凡人社（2002）
にほんご1・2・3 アルク（2002）
初級日本語 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 凡人社（2005）
毎日使えてしっかり身につく はじめよう日本語 初級1 スリーエーネットワーク（2006）

資料3（分析対象とした発音教材）

- A コミュニケーションのための日本語レッスン スリーエーネットワーク(2004)
B 1日10分の発音練習 くろしお出版（2004）
C 日本語の発音教室 くろしお出版(2006)

参考文献

- 河野俊之（1998）「日本語教科書のイントロダクションにおける音声項目の扱い方」『日本語教育方法研究会誌5』 筑波大学留学センター
河野俊之(1999)「日本語教科書のイントロダクションにおける音声項目の扱い方」『総合文化研究所紀要16』17-25,同志社女子大学総合文化研究所
土岐 哲(1986)「音声教育の面から見た教科書」 『日本語教育59』24-37,日本語教育学会

表A

	母音	子音	調音法	音節	長母音	特殊拍	母無声	連母音	ガ鼻濁	アクセント	ポーズ	プロミネンス	イントネーション	リズム
J E														
S F J														
はじ日														
新 基	本													
	解													
J C S														
はじい														
実践														
C M J														
日20														
げんき														
E														
み 日	本													
	解													
入門日														
J B P														

表B

	母音	子音	調音法	音節	長母音	特殊拍	母無声化	アクセント				ポーズ	プロミネンス	イントネーション			リズム	縮約形	その他音変化	音声文法	あいまい文	文構造	フォーカー	待音声	言いよどみ
								種類	区別	ル	複合			文	統語	疑問文									
A																									
B																									
C																									

評価基準

- 説明が詳しく記載されている「 」
- 極めて簡単な説明に終わっている「 」
- 触れられていない「 - 」。